

# 木幡瑞枝先生のご退任にあたって

池 明 観

木幡瑞枝先生は1966年に本学に就任され、1992年3月に定年退職されるまで26年間在職された。1966年といえば牟礼キャンパスの短期大学部が発足した年である。それから1988年に現代文化学部が発足して現在に至っているのだから、先生は牟礼キャンパスと歴史を共にされた方であるといえよう。

先生が本学の外国語学科を終えられたのは、1949年であった。それから東京大学文学部美学美術史学科へと進まれ、同大学院で美学を専攻された。そして大学院を修了されると同時に実践女子大学に就任され、そこで十年間も教鞭を取られた。そこから母校の招きに応じて本学に就任されたわけである。

私が先生にお目にかかったのは、文理学部の哲学科においてであった。それは15年以上も前に、私が客員として哲学科に関係して間もない頃であった。たまたま兼務で哲学科に出講していらしゃった先生の下で美学を専攻する学生たちが、私の文献講読の時間などに出席していた。先生にお目にかかった最初の印象はまず歯切れのいいきれいな日本語であった。おことばそのものが美学的なのかもしれないと思った。それから学生たちに対する熱意と思いやりであった。

その後1986年から牟礼キャンパスでごいっしょにさせていただいてからは、いつも先生のお人柄に接し、御指導を仰いだ。時には先生の学問にも触れることができた。現代文化学部が発足してからは、この学部の成長と発展に対して先生と喜びや感動、時には憂いをもともにさせていただいた。

先生について語ろうとすれば、少なくとも三つのことを念頭におかねばなるまい。第一は先生が東京女子大学の卒業生でいらっしゃるということである。そのために先生は東京女子大のよき伝統とは何か、それが今日においてどのように新しい意味を持たされねばならないのかというようなことに心を砕かれたのであった。

先生はクリスチャンではないが、東京女子大のキリスト教教育にも深い関心をお持ちであった。とりわけ今のように人間的なこと、学問的なこと、心の奥床しさが無いがしろにされる時代には、宗教的なことを思わざるをえないとお考えのようであった。

単に宗教的なことだけではない。先生は東京女子大学のよさを保とうとして目に見えないところで人一倍努力されたのではなかろうか。多くの学生が悩みがあれば先生をお訪ねした。そんな時先生はいつも前向きに励まされ、一人一人の成長を念じられた。失礼なことになるかもしれないが先生は多くの学生の母親であられた。先生によって元気づけられた何人もの学生のことを私は知っている。

そういうことが東京女子大学卒業生としての先生の一面であるとすれば、それが直

ちに先生の教育者としての姿に連なっていたことはもちろんである。私は先生から学生たちに対する非難とか批判のことばを聞いたおぼえがない。先生がいわれたのは常に教師としての反省であり、よりよき大学のあり方についてであった。

先生は労を惜しむことなく、問題があればいつも引き受けようとされた。卒論のことなどで苦しんでいる学生がいたら、御自分の研究とは離れていても、指導されることを苦とされなかった。そのためにいかに多くの学生たちが元気づけられ、めでたく卒業していったことだろう。中には最優秀の成績を収めた学生たちもいた。先生の心の中では誰をも拒まない教育愛が脈打っていたといわざるをえない。

限られた紙面に先生について私が存じあげていることをすべて記すわけにはいかない。先生のそのようなお働きは単に先生のお人柄からくるものではあるまい。それが先生の学問と思想によって裏打されているということはいうまでもない。

1990年の夏のことであった。韓国の誠信女子大の学生たちが日韓学生交流で来日した際、日本文化に関する特別講義を受けた。その時の先生の授業「川端康成論〈雪国〉について」は圧巻であった。これは私にとっては先生の講義に出席した唯一の機会であったが、川端の散文の世界を日本の伝統的な詩歌の世界に還元していくような、作品の構造、構成に対する見事な分析と解釈に私はほとんど我を忘れた。しかもあのやや間をおいたかみしめるような、すばらしい日本語で、よどみなく鮮かに展開されるのだから、それは実に美学そのものであった。

誠信女子大生を引卒してこられたフランス文学の李先生も感動しておられた。それから先生に御連絡申し上げて資料などをいただいたということを知っている。間もなくこのような先生の研究が集大成されて『川端康成一作品論』として出版されるという。期待してやまない。

先生は人間的に孤高なところをお持ちになっていらっしゃるが、ほんとうは多情多感で、だからこそいつも自制してこられたのかもしれない。そういえば先生のあのような日本語にもそんな節があるような気がする。心が細やかで、時には眠れられぬ夜が続くのだといわれたのも、そのあたりに原因があったのかもしれないと、それこそ失礼なことを思ったりする。

先生の学問と思想の原点にはギリシャ、とりわけギリシャ悲劇があったと思われる。そのために「アポロンとディオニュソス」(1965年)や「悲壮美の考察」(1977年)などの論文を書かれた。そして「J=B・デュボスの古代劇論」(1974年)や「J=E・シュレーゲルの演劇論」(1975年)などにおいて彼らのギリシャへのアプローチを検討された。そのような美学論の上に立つて先生は漸次『萬葉集』や蕪村、漱石、芥川、川端などの文学を分析し解釈する方向へと向かわれた。それは先生御自身の美学理論の実証または具体化という意味をおびたものであるといえよう。

先生の御研究についてもっと詳しく触れる紙面がなくなってしまったことは残念である。今はただ先生の御健康となおいっそうの御研究をお祈りしたい。長いあいだ御苦労さまでございました。